

# 吉野川歴史探訪 吉野川利水列伝 その1

～水は必ずある 用水の開削～

こんにちは。別宮川三郎です。創刊以降 18 回にわたり、藩政期から昭和初期の吉野川治水の歴史について探訪しました。農民たちにとって治水は、同時に農業用水を確保するための闘い、すなわち利水の歴史であったとも言えます。今回から利水事業に命を賭けた先覚者たちの遺跡をたどりながら、治水と表裏一体をなす利水の歴史を探訪しましょう。

今月号は、袋井用水と麻名用水。今日に残る 2 つの用水を開発した楠藤吉左衛門と井内恭太郎。吉野川とともに生きようとした農民達のために、私利私欲を捨てて悪戦苦闘した二人の血と汗の物語を探訪しましょう。



図-1 麻名用水、袋井用水位置図

「この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の 5 万分の 1 地形図を複製したものである。  
(承認番号 平 28 四複第 104 号)」

## 1. 藩政時代最大の快挙 ～楠藤吉左衛門と袋井用水～

徳島市鮎喰町二丁目の「上鮎喰」バス停の東側を流れているのが袋井用水です。そこに往時の水源地跡を示す案内板があります。それには名東郡島田村庄屋・佐藤吉左衛門（のちに楠藤に改姓）が島田村、庄村、蔵本村の水不足に悩む農民の姿を憂い元禄 5 年(1692)から約 7 年をかけて袋井用水を開削したと記されています。当時、徳島藩では商業経済の発展が著しく、特に農村では新田開発の拡大政策が打ち出され、農業技術の進歩を背景に商品作物の栽培など生産が著しく増大し始めたときであり、藩としても用水の必要性は十分理解していました。そのため、利水施設を整備しようとしたのですが、地形によっては用水の導水が容易でないところが多く、利水施設が必要とわかっているにもかかわらず、開発に長い歳月と多くの労力、多額の費用を投入することは当時の藩には重荷であり、この地域の用水は手つかずの状態でした。地域の農民は干天の日、むなしく天を仰いで雨乞いを神に祈り、あるいは僅かな水を求めるため、血で血を洗う水争いの悲劇を繰り返すこともありました。このような窮状を黙視できずに奮い立ったのが楠藤吉左衛門なのです。

吉左衛門は、「水は必ずある。掘れば水は出る。水源地はきっとできる。」という確信を持っていました。吉左衛門は毎日、水源地探しに夢中になりました。そしてあるとき、吉左衛

門は水が少し湧き出してガマが生えているのを見て、昔の水脈を考え、水源地の溝になることを確信しました。

郡奉行に願い出て幅 10 間(約 18m)、長さ 200 間(約 360m)の用水堀を掘る許可をとりつけて、農民総出で出役し水源地掘削工事は始まりました。しかし、大量の土砂の運搬に、<sup>くわ</sup>鍬ともっこ(図-2)による土木作業は難渋を極め、待ちに待った水はいつこうに出てきませんでした。それでも、吉左衛門は諦めませんでした。夜中、人が寝静まったころ、水が湧きそうなところでうつ伏せになって水の音を聞き定め、1 尺(30cm)ほど掘り下げても水が湧き出ないときには、「我が首を<sup>だてまつ</sup>奉ります」と官に申し出て許しを乞い、再び掘り下げたところ、にわかに水が噴き出し人々は感動したそうです。

水源地が完成したのちも、吉左衛門の子、孫に受け継がれて水路は拡張されていきました。この楠藤家三代によって、袋井用水は完成し島田村、庄村、蔵本村の数百町歩の水田は潤い農業生産は一段と発展したのです。

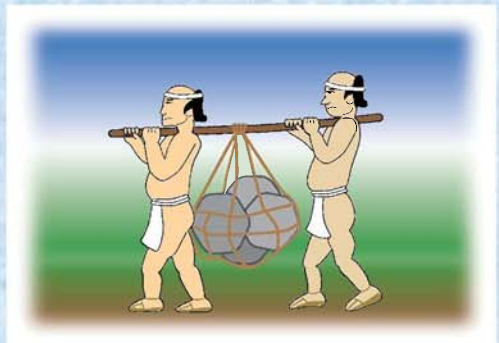


写真-1 袋井用水水源地 写真-2 楠藤翁頌徳之碑  
徳島市鮎喰町 徳島県指定文化財(史跡)

図-2 もっこのイメージ図

用水池の三方を堤で囲い、袋の口から水が出るようにしたので、「袋井用水」と名づけられたという。老松の間にひっそりたたずむ「楠藤翁頌徳之碑」。これは楠藤吉左衛門の功績を後世に伝えるため、大正 10 年(1921)に建立されたものなのです。

## 2. 先人達の夢の実現 ～麻名用水と井内<sup>いうちきょうたろう</sup>恭太郎～

幕末から明治にかけて、先人達は、吉野川流域に大規模な用水路を開削することによって、藍作から米作への転換を図り農業経営をより安定したものにしたいと願っていましたが、この壮大な構想は容易に実現には至りませんでした。その理由は、技術的な困難さに加えて莫大な財政負担を強いることもありましたが、利水を実現するためには、それ以前に吉野川の治水をどうにかしなければならない問題もありました。また、吉野川下流域の土地の多くは、肥沃な畑地であり大半が藍作に適し、当時の農業経営は藍作を主としており、米作への転換を望まない人もいたのです。その後、明治中期頃、安価なインド藍や化学染料の輸入が盛んになるにつれて、国内の藍の需要は減退し藍価は低下したため、農業転換を迫られたことなどを背景として、徳島県屈指の大農業用水「麻名用水」(写真-4)が、紆余曲折の末、明治 45 年(1912)に完成しました。この事業により、吉野川右岸(南岸)の吉野川市鴨島町から名西郡石井町にかけて、南北 2 つの幹線と多くの支線水路が設けられ 1254 町歩あまり(大正 3 年調べ)の水田を灌漑できるようになったのです。それでは完成までの経緯について探訪しましょう。



写真-3 井内恭太郎  
(1854-1934)



写真-4 開設当時の麻名用水

最初の麻名用水計画が立てられたのは、明治32年(1899)です。岩津の淵から引水し、<sup>おえ</sup>麻植・<sup>みょうざい</sup>名西両郡の田畑を灌漑するものでしたが、この構想を現実のものにしていく過程は並大抵のものではありませんでした。麻植・名西郡長が発起人となり、創立総会を開催し、水利組合条例の制定にまでこぎつけましたが、藍作に固執し米作に不安を持つ人達、巨額の負担金に不満を持つ人達などの賛成が得られず、この計画は頓挫してしまいました。

この時の麻植郡長が、井内恭太郎(写真-3)でした。井内氏ら推進関係者は再三にわたって用水案の実現を説いてまわりましたが、農民は聞く耳を持ちませんでした。この時の様子が麻名用水碑に刻まれており、「当初反対論者ハ地価反百二三十円ニ過ギサルニ用水費反八十余円ヲ費スハ本末ノ序ヲ失ヘリトテ言論ニ文章ニ悪罵シ愁訴シ有ラユル手段ヲ尽シ或ハ主唱者及ヒ創立委員ヲ脅迫シ威嚇シ或ハ主唱者ニ危害ヲ加ヘセントセシコト幾度ナルヲ知ラス」と事業負担金をめぐって反対論者から危害すら加えられていた様子が活写されています。

その後、明治37年(1904)にこの地域一帯が大干ばつに襲われ、これがきっかけとなって、麻名用水計画が再浮上し実現の機運が一気に高まりました。用水による米作栽培を強く要望する森山村、牛島村、浦庄村、高原村、石井町の五か町村の水利組合を組織して、取水口については、当初の岩津の淵から案を改め川島城山より取水するという計画が立てられました。明治38年(1905)には「紀念麻名普通水利組合」が結成され、管理者に井内恭太郎が就任しました。この時、井内氏は名西郡長の職にあり、主唱者自らがその実行責任者として敏腕をふるうことになったのです。ちなみに、「紀念」と冠せられたのは、この年の日露戦争の「戦勝」を記念してのことでした。

工事は明治39年(1906)に起工され、明治41年(1908)、待望の通水式を迎えるに至りました。さらに、支線水路の工事を終えたのは明治45年(1912)のことでした。

麻名用水の建設は、明治30年代以降における藍作経営の衰退を背景としており、米作への転換という農業基盤の再編を目指した重要な意義を持つ利水事業であったということができます。麻名用水碑には、先の碑文に続いて、「然レトモ主唱者ハ最初ヨリ一身ヲ犠牲トシ隠忍自重遂ニ今日有ルヲ到セリ」と記されており、主唱者とは、むろん井内恭太郎のことなのです。名西高校の南にある水利組合事務所前には、彼の銅像(写真-7)があって、その碑文には、その人となり<sup>ごうちよく</sup>を「剛直」にして「敦篤」と刻んでいます。



写真-5 麻名用水取水口（川島町城山）



写真-6 麻名用水碑



写真-7 井内恭太郎翁像 石井町

安政元年（1854）、阿波市市場町大俣に生まれました。明治 14 年（1881）に徳島県属となり、土木課営繕係・土木係となりました。明治 17 年（1884）には、オランダ人工師ヨハネス・デ・レーケが吉野川巡検に来たとき、その治水調査に参加していました。

明治 18 年（1885）に着手された内務省直轄事業では、徳島県庁の土木出張所の主任として吉野川高水工事（堤防工事）を担当。

明治 21 年（1888）には覚円騒動に遭遇。

明治 28 年（1895）、海部部長、同 30 年、麻植部長として赴任し、麻名用水の構想を発案。のち美馬、名西部長となり、板名用水（明治 45 年）建設にも努力。退官後、名西郡水力電気株式会社を設立し、事業家としての道を歩みました。

昭和 9 年（1934）80 歳没。



今月号は、藩政期から明治にかけて開発した袋井用水と麻名用水について探訪しました。用水開発には、そもそも用水施設を守る治水施設が必要で、袋井用水の場合は鮎喰川に蓬庵堤があり、麻名用水の場合は、藩政期末から明治のはじめに川島から石井に至る連続的な堤防が築造されていました。

また、技術力、財政力、調整力も不可欠であり先人達の労苦が理解できます。さて、来月号では吉野川利水列伝その2として、吉野川下流の海に近い低湿地で 16 世紀頃から本格的に始まった新田開発について探訪したいと思います。

